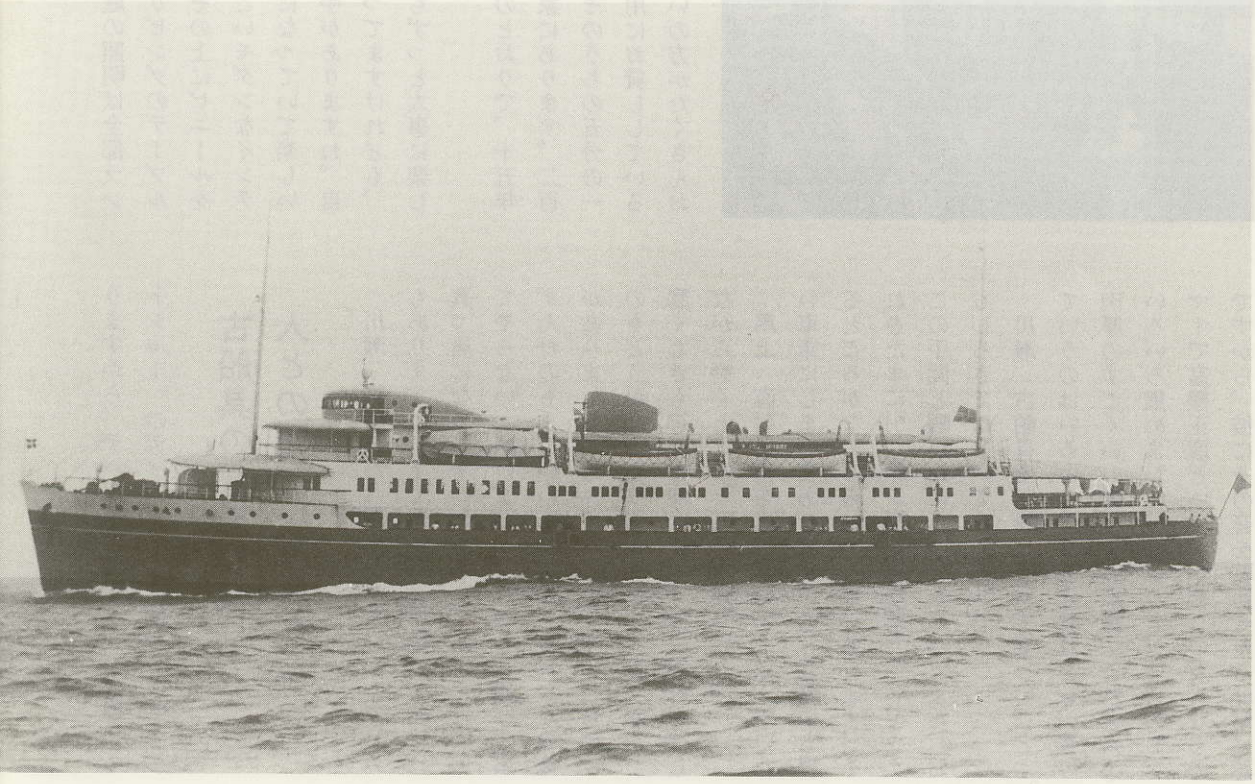
# 橘　丸

《主要目》客船、東京湾汽船所属、1,780総トン、主機ディーゼル2基、出力2,400馬力、最高速力17.8ノット、旅客定員1,230人、1935年三菱神戸造船所建造

## 流線型で話題をよんだ伊豆大島航路客船



### 流線型客船の登場

伊豆七島航路の東海汽船は、この十一月に創立百年を迎えた。東海汽船の前身「東京湾汽船」が設立されたのは一八八九（明治二十二）年十一月。日本郵船、大阪商船三井船舶と並ぶわが国屈指の老舗船会社である。

その一世紀にわたる歩みの中で、乗客に最も親しまれた船はと言えば、流線型で知られた伊豆大島航路の客船「橘丸」だろう。

大島航路は、昭和にはいって観光化が進んだ。この時期、明治以来の小型スチーム貨客船に代わって、レジャー色の濃い優秀ディーゼル客船「菊丸」「葵丸」が三菱神戸造船所で建造され、大島航路に就航した。その結果一九三四（昭和九）年には、年間利用客が二十万人を超えた。これは、今日の東京〜大島航路の旅客数に匹敵する数字だ。

「橘丸」は、こうした背景のもと、大島航路レジャー客船の決定版として一九三五（昭和十）年五月に三菱神戸造船所で完成。翌月から、東京〜大島〜下田間に投入された。

大きさは、「菊丸」「葵丸」の二倍の千七百八十総トン。最高十八ノットの快速は、それまで五時間半を要した東京〜大島間を三時間半に短縮できた。公室には、思い切りモダンな装飾が施されたが、彼女の名を有名にした

のは、その流線型の外形デザインだ。

〝東京湾汽船の遊覧船隊に、また新しき一つの光輝が加はりました。その形も麗はしき流線型。すべての点で素晴しい設備を整えた名実共に世界に冠たるモダーン・シップ。橘丸がそれであります……〟。

これは竣工記念パンフレットの冒頭の文句だが、これを見ると彼女の流線型は、機能上の効果よりもむしろ、営業上のメリットを考えて採用したフシがある。設計にあたった南波松太郎博士によると、この着想は、当初の設計にはなく、工事半ばに決まったものらしい。したがって全船完全にというわけにはいかず、最も目立つ船橋の周辺と煙突などを流線型にしたという。

## 長江中流の鄱陽湖に沈む

彼女がデビューした二年後に日華事変が勃発した。迫りくる戦雲は、平和な島がよいの船を、厳しい軍務の世界に引きずりこんだ。

一九三八（昭和十三）年六月、彼女は海軍特設病院船として徴用された。煙突と舷側に赤十字を付けた彼女は、翌七月、東シナ海を越えて長江（揚子江）に入り、九江で傷病兵を収容した。東京湾の箱入り娘にとって、最初の外地への航海だった。

だが、この大陸行は、彼女には全くツイていない航海となった。日本を出てひと月たつかたたないうちに、長江中流の鄱陽湖（ポーヤンこ）で、空爆を受け沈んでしまう。

単発複葉の米カーチス・ホーク型戦闘爆撃機からの至近弾が、左舷に大穴をあけた。青木吉蔵船長は、彼女を浅瀬に擱座させようとしたが、浸水がひどく、水深六メートルの湖に横転したのである。

一カ月後、彼女は引き揚げられ、誕生地の三菱神戸造船所で元の姿に戻った。

戦争たけなわの一九四三（昭和十八）年三月、彼女は今度は陸軍輸送船となり、宇品～シンガポール間を往復。その間、自由インド仮政府首相のチャンドラ・ボースが、東京で開催された大東亜会議に出席のため、シンガポールから、閣僚とともに乗船している。

同年十月、彼女は再び海軍特設病院船に徴用され、南方水域に赴いた。そして、終戦間際、国際法違反で米艦に拿捕されるという不祥事の舞台となった。世にいう「橘丸事件」である。

## 偽装病院船事件に巻き込まれる

終戦直前の四五（昭和二十）年八月三日、輸送船にこと欠いた日本陸軍は、病院船の彼女に白衣を着せた将兵と軍需品を乗せ、アラフラ海のカイ島からシンガポールへ向かわせた。ところが、バンダ海で米海軍の駆逐艦二隻の臨検を受け、ことが露見、拿捕された。これが「橘丸事件」のあらましだ。

制海権、制空権を失った日本軍が、国際法違反を承知でやった末期的な行動だった。

この事件で、広島第五師団隷下の将兵千五百六十二人が捕虜になり、師団長と師団参謀長は、責任をとって自決した。また「橘丸」は、マニラに回航され、リンガエンで終戦を迎えた。その際、乗組員全員はモンテンルパに収容されたが、取り調べの結果無罪となった。だがその後、安田喜四郎船長のみ国際法違反に問われ、特殊戦犯として二年二カ月間巣鴨プリズンに投獄されたのである。

さて、戦後の「橘丸」は、ウエーク島から海軍の栄養失調患者千人を故国へ運んだのを皮切りに、中国、台湾からの引揚者の輸送に従事。一九五〇（昭和二十五）年四月にやっと、なつかしの大島航路にカムバックした。

以後二十三年、「東京湾の女王」としての平和な航海が続いた。

一九七二（昭和四十七）年十二月二十五日午後二時発の大島便が、彼女の大島航路定期客船としての最後の航海となった。翌一月七日に引退、代船「さるびあ丸」にバトンタッチした後、兵庫県赤穂で解体された。

（山田　廸生）